

第3部会

構築第七回国際研究集会報告書、名古屋大学大学院文学研究科、二〇〇六年及び Toshihiro Wada (ed.), *Indian Philosophy and Text Science*, Delhi: Motilal Banarsidass, 2009)。本稿ではこの「テキスト科学」という新しい方法論的提案を踏まえつつ、筆者自身の見解について論じて行きたい。

この「テキスト科学」という方法論は、コンテキストという概念に注目する。ここでいう「コンテキスト」という概念は、テキストの外部についての様々な情報である。もちろん、これまでもインド哲学においてコンテキストについての議論がなかったわけではない。しかし、和田によれば、その研究の多くが無意識的であつたので、それを意図的に駆使して方法論を組み立てたいとする。和田は「テキスト科学」の根本原理を「サンスクリットあるいは他の言語で書かれているテキストを理解するために、他の研究領域によって提供される情報のように、私たちがそれらの外側の要因として働くもの（＝コンテキスト）への注意をはらうこと」と規定している。ところで、この和田の研究グループの著書では、コンテキストの概念において対立する見解が出されている。歴史的背景をインドの哲学を理解する重要なコンテキストと見なすヨハネス・ブロンコルストの見解と、テキストの「史的側面」だけでなくテキストの「作品的側面」を重視し、その「作品的側面」を持つ「対話的テキスト」にコンテキストを見出す下田正弘の見解である。ブロンコルストは、インド哲学の学説や論点は、インドの歴史的社会的背景抜きに理解することは不可能であり、それを無視して西洋の哲学の議論と比較することを極度に危険視する。これに対し

て、下田は思想家のドミニク・ラカブラの「対話的テキスト」の議論を援用し、コンテキストとは現在との関係なしで閉じられている過去ではなく、対話的テキストである仏教聖典の中の「現在に影響する過去」を示す概念と考える。

筆者の立場は、下田の見解に近いものである。「テキスト」とは、記号論者のウンベルト・エーコがいうように単なる物質的存在ではなく意味作用の体系とコミュニケーションの過程との混合概念であり、一つの事態として存在しているものであると考えるからである。社会的歴史的背景というコンテキストは、そのコミュニケーションの過程に存在する一つの重要な要素ではあるが、それ以上の存在ではない。むしろ、このテキストに関するコミュニケーション（ラカブラのいう対話）的要素を無視し歴史的社会的背景の側面だけに研究者が縛られた場合、そのテキストは博物館に飾るべき遺品と化してしまう。逆にそのテキストが古典的な価値を持つものであればあるほど、そのコミュニケーション的要素により、新たな読みが生まれてくる。その新たな読みや解釈こそ、インド哲学研究の豊かな成果の源泉となり得るのである。

再考ブーバー「我―汝」思想

堀川 敏 寛

マルティン・ブーバーの「我―汝」思想は、ブーバー研究の第一人者であるアメリカの研究者モーリス・フリードマンとエ

マニエール・レヴィナスの解釈によって理解されるところが大きい。前者は対話の哲学として、また後者は倫理的関係性を扱う他者論としてブーバーの「我・汝」思想を解した。これらの視座は、ブーバー理解に当たって適切であろうか。本発表では一九二三年の『我と汝』執筆時における、彼が「我・汝」概念を創出し、「我・汝」思想を考案した意図について再検証したい。

第一に『我と汝』のテキストを分析すると、彼が力点を置く主要概念が浮き彫りになる。本作品では「対話」(Dialog)という表現は見られず、主題となる概念は、根源的な「関係」(潜在状態)と「出会い」(顕在状態)である。また論考が根元語「我・汝」「我・それ」の説明から始まっているが、根元語という表現は他の著作において見られず、「我・汝」思想の展開順序を次のように再検証する必要がある。一、「初めに関わりあり」と言われるように、根源的に我々に向かって生ずるしるしがあるのだが、我々は自らを開くことがなく、「我・それ」関係にて日常を営んでいる限り、それに気づくことはない。二、「その世界」から距離を取り、その状態を脱する。三、「汝の感覚」「生得の汝」を働かせる中で、汝の呼びかけに自らを向ける。四、「汝との出会い」によって初めて「我・汝」関係が築かれ、そこで初めて自己が「我」として存立する。これが「我・汝」関係成立の順序である。我と汝の出会いとは、互いが語り語られる中で、「関係内存在」として自己が存立する過程を経て互いが向き合った瞬間、両者が「ただ関係の中に立つ」ことである。

第二に『我と汝』執筆当時のブーバーの学問的関心と生活様式から検証したい。ブーバーはローゼンツヴァイクの依頼によって、当時ユダヤ自由学院にて「現在としての宗教」(Religion als Gegenwart)という題目で講義を行っており、『我と汝』の草稿はこの講義内容を軸に書かれた。ここでは宗教が、過去の記憶でも未来の希望でもなく、現在の我々の実存に関わるリアルな問題であるのだが、現代社会は「その世界」の影響が多いため、宗教的に生きることの難しさが語られていた。また彼と共同で行ったヘブライ語聖書の独語訳では、聖書における神の言葉と読者とが出会うことを目的に翻訳が試みられた。最後にシオニズム運動を通して、アラブ側の主張に向き合う必要性に迫られていた。つまりブーバーは実生活を通して、異他なるものからの語りかけに直面する状況下にあった。

ブーバーは自己(我)と他者(汝・それ)という「対象」に対する関係性を論じたのではなく、「我・汝」「我・それ」という表現を通して「実存の関わり方」が二種類あることを述べていた。それは他者に対して責任を負う倫理的関係性ではなく、他者を措定せず、「間の領域」にて生じている根源的な語りかけに自らを向け、互いに向き合って「汝と言う」ことに責任を負うことを論じたのである。したがって「我・汝」思想の焦点は、「関わりへと参入するための関わり」と表現することが的確であろう。対話以前に、如何にして自らを汝へと向け、潜在状態だった両者の関係を「出会い」によって顕在化できるか、その「関係への努力」(Beziehungstreben)がこの思想にとって重要なのである。